

# 本づくりの根 ● 赤羽一鎌倉一桜木町

## 三浦 衛 & 春風社 × 上野勇治 港の人 対談

### 出会い、そして 出版社に入るきっかけ

かつて同じ出版社に勤め同僚だった二人が、それぞれに出版社を立ち上げて独立し、おおよそ二十年。いまだからこそ語れる出会いや当時の思い出、本づくりに対する思い、そしてこれからについて。出版界が激震に見舞われているいま、「本づくりの根 赤羽一鎌倉一桜木町」と題して行われた春風社代表・三浦衛氏、港の人代表・上野勇治氏の対談をここに採録する。(9月1日、桜木町・横浜市教育会館にて)

三浦 春風社は一九九九年十月に横浜で創業、港の人は一九九七年四月に鎌倉で創業していますから、港の人は弊社より二年ほど先の創業ということになります。そもそもわたしが出版界に身を置くきっかけを与えてくれたのが上野さんでした。上野さんとの出会いがなければ、出版の仕事に携わることにはなかつたと思います。

横須賀で高校の教師をしていたころ、竹内敏晴さんの演劇研究所に通っていました。そこで出会ったいろいろな話をするようになります。友人にも話さないようなことも上野さんだけは話すといいことが多々ありました。その上野さんから声をかけていただき、赤羽にあった春風社という出版社に入るようになったのです。

港の人という出版社と、その本づくりについて、きょうはお話だけだとは思っています。港の人の本づくりに一冊二冊が工芸品のようだという気がしています。工芸品というのは写真でみただけではわかりませんが、手に取ってみればわかると思います。外(装丁)だけの話ではなくて、まず中身があって、それに相応しい外がある。

港の人のホームページに、「わたしたち「港の人」は、詩・文学を中心とした人文書と、日本語学・社会福祉学などの学術文献を手がけている出版社です。いま、生きる、この「切実」を問う出版社であることを願っています。」とあります。このように港の人では、詩集や歌集、文学にウエイトがかかっています。それに対して春風社は人文・

社会科学の学術書が中心です。両社は共通の部分も少なからず、やはりそれぞれ特徴があると思います。

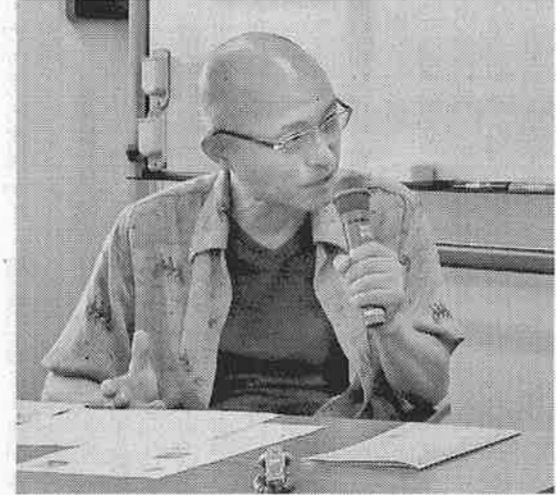
まずはわたしが出会ったところから話しましょう。上野さんは広島のご出身で、京都の大学に行かれていますが、その後、どういった経緯で竹内演劇研究所に入られたのでしょうか。

上野 わたしは二十五歳のときに上京してきました。それまでは半年間、大阪の印刷会社で働いていました。創業したばかりの会社で、社員は三人。そこで始めて会社員となりました。その年の夏に、横浜にいた友人に会うために上京し、詩人の北村太郎さんともお会いしました。そのとき話の流れで、こっちに来ないかと誘われて、会社を辞めて上京することになったんです。それまでは何をしていたかわからず、モラトリアムという感じでした。

東京では上田美佐子さんも出会いました。上田さんはいま両国でシアターX(カノ)の芸術監督・演劇プロデューサーをされています。出会ったころ、上田さんに芝居が面白いなと興味を持ち、いろいろみさせていただきました。ある劇団の立ち上げ公演がありました。いまでも



上野勇治氏



三浦衛氏

三浦 港の人の本づくりにうかがううえで、もう一点あげていただいています。宇佐見英治著『言葉の木陰 詩から、詩へ』です。この本も工芸品のように、雰囲気独特ですね。

書体(フォント)についてはどうに気に入っているものがありますか。

上野 イワタ明朝体フォントが好きです。このフォントは冷たい印象を与えますが、すっきりと洗練されて読みやすく、多くの本に採用しています。

三浦 天地左右のアキや行間などあいまあって独自のたなすまいを感じます。レイアウトについてはどのようにされているのでしょうか。

上野 フォントだけではなく編集者としての感覚も大切にしています。読みやすく、わかりやすい本づくりに大切なことです。著者から原稿を預かったとき、その原稿をどのように捉えるか。組版というものは、そこから組み立てていく作業だと思います。わたしは、原稿というものはそもそも読めないものだと感じています。「読めない原稿」を「読める本」に仕立てていくというところが、わたしにとっての組版なんです。原稿は読めないものだと感じる感覚が、わたしにはあるのです。

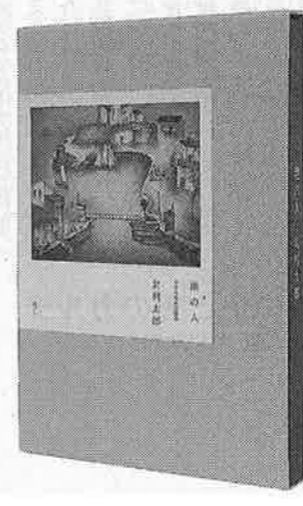
三浦 おまのひんとかな(笑)。

上野 頭で読めるのではなく、身体で読むほうがいいというところかもしれません。原稿は力オスだと思つて、編集者がそれを編んで読めるようにする。本の設計図をつくっていく。

ある日、改行ってなんだろうと思つたんです。改行には二種類あります。ひとつは強制改行、もうひとつは自然改行です。強制改行というのは、著者が自分の意思で改行をすること。自然改行は、決められた一行の文字数に従って自動的に起きる改行です。ですが決して「自然」に起きるのではなく、そこには意志が働いて、一行の文字数が決められている。その意志というのは、編集者の意志なのではないかと思うのです。編集者の意志が、一行の文字数と一行の行数を決め、そのことによりどういった秩序をつくっていくのかを問われるのだと思います。

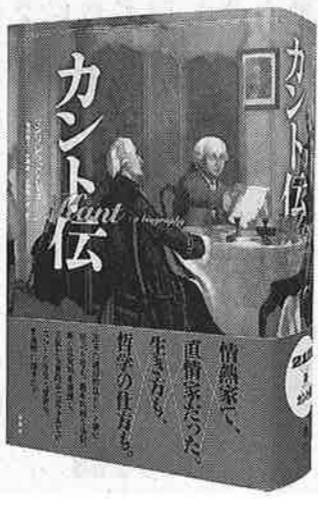
もうひとつ、行の発見というのがあります。たとえば歌集をつくるとき、一行に二首組や三首組の場合がありますが、頁のなかになんとか配置するだけでは、歌集は成立しません。無数の行ラインのなかからその歌集にあ

よく覚えています。チェーホフの「かもめ」を上演するという。あなたは暇そうだから演出助手をやってほしいといわれて、面白そうなので参加しました。台詞の読みから立ち稽古、そして公演の最後までずっと演劇の場に立ち会うことができました。演出助手というのは演出家と役者のあいだにいろいろな存在で、演出家、役者がぶつかり合う葛藤を目の当たりにした。そこで何を発見したかというところ、これは妄想ですがありませんが、演劇のなかに「世界」がみえた。そこで「世界」に出会ったわけです。これが演劇なのかと震え、感動した瞬間がありました。奥手ですが二十六、七歳のときに演劇がやりたいと思つた。竹内敏晴さんの著書『ことはが舞われるとき』を読んでいたので、演劇をやつたら竹内さんのところかと思つたわけです。



▼北村太郎著『港の人』付単行本未収録詩17・9・26刊、四六判函入一四〇頁・本体二二〇〇円・港の人

▼マンフレッド・キューン著 菅沢龍文・中澤武・山根雄一郎訳『カント伝』17・6・30刊、四六判一〇四〇頁・本体九〇〇〇円・春風社



う表現としての行を探し出すという組版の作業は、わたしにとっては、歌集を編むとひとりで大きく重なる部分があります。そのことをわたしは「行の発見」と呼んでいるのです。そのことをわたしは「行の発見」と呼んでいるのです。

歌集にせよ詩集にせよ、まずは読めないものを読んでもいい。そして原稿が発熱しているものを感じ取り表現していく。時間を経てさらに原稿を読みこんでいくと、そのとき受け取る世界が最初とは違ふなと思つ場合がある。この場合も一度、一から組版をやり直す。それを繰り返すことで行を発見するんです。この本に一番あう表現はどの行なのか、それを掴まえるのが編集者の仕事なのではないでしょうか。ただし本になったものが絶対というところではあっても、時が移れば、わたしの感じ方も変わります。社会の状況も変わりますから。それでも現在の最上表現を発見して、本に定着させていきたいと試行錯誤しています。

三浦 上野さんの本づくりに対する意図は、『言葉の木陰』にもよく出てくると思います。副題の「詩から、詩へ」にある読点も意識してつけているのですか。

上野 宇佐見英治さんの生涯を考えてつけた副題です。宇佐見さんは文筆家、思想家として戦後を歩きました。辻まことや矢内原伊作などと親交しながら、明澄な文章を修練してひとつの世界をつくられた。彼の出発点は短歌でした。宇佐見さんは歌人であり、詩人なのです。帝大を繰り上げ卒業で戦争に征かれ、東南アジアで悲惨な体験をされて、命からがら復員してきました。そのとき、短歌のありかたに疑問を持たれた。翼賛体制のなかで詩人や歌人がこぞって非人間的な、戦意高揚のためのうたをつくって、多くの若者を無残な死に追いやった。そのことに非常に憤りを持たれて、一度短歌をやめてしまった。そして、集団的狂気に抵抗しようとする日本語を築かなければならぬと散文に身を置かれました。

『戦中歌集 海に叫ぶ』というのは、タイ、ビルマを行軍中につくられた戦中歌集なのですが、五十年後、一九九六年に公刊されました。日本がまた戦争に傾いているという時代のおおや雰囲気を感じられて、この歌集を世に問うたわけです。それから晩年に詩にかえっていき、辞世に「骸骨となりてまろやか世にいたり」をよみ、世を去つ

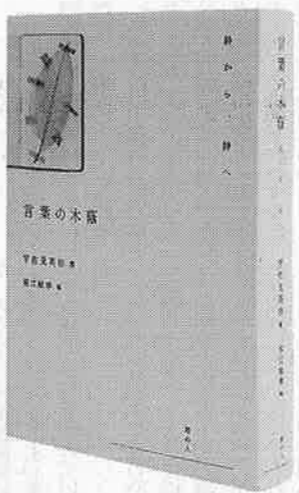


何やってるの」と妻にいわれて(笑)、演劇を断念し、出版社に入りました。

三浦 いい話ですね(笑)。当時からふたりとも神奈川県住まいでしたので、研究所のあった中野坂上から一緒に帰ることが多かった。本当にいろんなことを話しました。阿部薫やステイヴ・レイシーなどフリージャズの話も話しました。それまでは御とオーソドックスなジャズをきいていましたが、阿部薫もステイヴ・レイシーもフロアがなくてどうきいていけばかわからない。しかし、阿部薫の「なげんしの死」をきいたとき、ほとんどフェイスにかきこえないが、途中で「フカシの雨がやむとき」のメロディがすこし入る。それを耳にしたとき身体が震えるほどの感情性を感じた。

八島太郎の絵本『からすたろう』の話もしたね。勉強ができるわけでもない地味で目立たない男の子が主人公です。ただ、学校は休まない。山奥からひとりで歩いてきて、またひとりで帰っていく。小学六年生のときの学芸会で、先生が少年を壇上におぼろげに、少年はなにをするか。先生や生徒や親のまえで、からすの鳴き真似をする。それも

▼宇佐見英治著、堀江敏幸編『言葉の木蔭——詩から詩へ』3・23刊、四六判三三六頁・本体三二〇〇円・港の人



いろいろな鳴き方で、何度読んでも涙が出る場面です。上野さんからはおもしろい絵本をいろいろと教えてもらいましたが、この絵本は感動しました。

ある日、電車で二階に帰っていて、ラストエフスキの『白痴』の話になりました。吊り革につかまって話していたとき、すぐ近くに酔っ払いのおやじがいて揺れながら我々をじっと見ていた。こちらに寄りかかってくるんじゃないかというほら、大きく揺れている。寝られたらいいわけではなく、たまたまだけのことなのですが、この情景は忘れられない思い出としておぼえています。上野さんは忘れていないのですが(笑)。なぜ忘れずにいるかというと、要するに自分がどれだけ真面目に感じ、考えて言葉にしても、第三者の目からみれば滑稽でしかないということにそのとき気づいたからです。勉強をして、こつこつと見方もある。あいつも見方もあると知っても、結局のところ自分のものの見方に収斂してしまうところがある。まったく別の目もついついの目を持つのはとても難しい、ということを竹内さんも仰っていました。そのとき、この電車の情景をずっと思い出しました。「世界」に触れた瞬間といえるのかもかもしれません。

上野さんは大空社が倒産するまえに港の人をはじめられ、わたしは倒産するまで身を置いていた。そして倒産の翌日に、赤羽の居酒屋まるます家で同僚たち三人で飲んだ勢いでつくったのが春風社です。わたしの書いた『出版は風まかせ』は、そこから書き起して行きます。

### 港の人の本づくりについて

三浦 そのころ港の人の本づくりについてお話をいただきました。今日はそれぞれ各自の本を二点選んで書いてみますが、上野さんが選んだのはまず北村太郎の詩集『港の人』です。読売文学賞をとった詩集に、未収録の詩を入れたものですね。

上野 昨年、創立二十周年の記念に復刊しました。

三浦 社名はここからですか。

上野 そうです。詩集のタイトルをちぎって社名にしたのか。当時何を考えていたのかはもう覚えていないのです(笑)。

### 春風社の本づくりに根

ことが大切だと思っています。

三浦 わたしは『石巻片影』と『カント伝』の二点を最初に申しました通りの、上野さんは出版の仕事に携わってきた経験を与えてくださった方です。春風社を立ち上げて十月から二十年目に入りますが、その間、港の人は常に意識している出版社のひとつです。こつこつと本づくりにしているのかと勉強し参考にしたが、本を手にとっています。そして、ならば春風社にはどのような本があり方があるのか、ということ意識してきました。これまででもうですが、これからますます学術書を中心に刊行していきたいと思っています。大学出版会がくくる本が学術書なのだという方もいます。たしかにそういう傾向もなきにしもあらずでしょう。しかし、そういう時代であればこそ、春風社のような在野の、大学出版会ではない出版社が学術書を出していかないと意味があるのではないかと感じています。

もう一点は『カント伝』。学術書や学問というものを考えるとき、教育哲学者の林竹二さんのことが常に頭にあります。林さんの著書に『若く美しくなったソクラテス』という本があり、そのなかに「知識による救済」という論考があります。その言葉を、春風社のこれからを考えるときに思い出します。知識によって人間は救われるのかという問題がいつもあるんです。

林竹二さんは宮城教育大学で学長もされた方ですが、小学校で授業をしたり、横浜の寿町で授業をしたりとすこし変わった活動を晩年にされていきました。そのなかに「人間について」という授業があります。林さんは、「蛙の子は蛙」というわけがあるけれど、そのことわざと同じような意味で、人間の子は人間といえますか」と生徒に投げか

三浦 北村太郎さんについて印象に残っているエピソードはありますか。

上野 北村さんは若いわたしたちに対してでもっともフランクで清々しく、あたたかい方でした。決して偉ぶらず、それでいて博識でした。上京したところ、編集の仕事をやりはじめたのも、北村さんから知人が勧めていた作品社を紹介してもらったのがきっかけです。それから北村さんが一九九二年にお亡くなりになられるまでずっと、いろいろ教えていただいたり、面倒をみていただきました。

三浦 『北村太郎の全詩集』(飛鳥新社)に、上野さんも「柏葉の北村さん」という文章を寄せていますね。詩人というのなんておもしろい精神をしているのかと表現されています。年齢を感じさせないおもしろさというものは、会話のなかにも感じられましたか。

上野 ありました。そのおもしろさというものは、詩人だからというよりは、北村さんだからなのだと思います。詩人にもいろいろいるんじゃないですか。

北村さんはもと戦後詩をつくりあげた「荒地」というグループのなかのひとりでした。鮎川信天、田村隆一、吉本隆明などといった方々が「荒地」の同人にいました。そのなかで北村さんは活躍しておられた。鮎川さんは途中で詩を書くのをやめました。北村さんは晩年を経れば終ることに、詩の濃みや鋭さが増していききました。それはなぜか。「荒地」には旧態依然とした詩を否定して新しい自分たちの感性や思想を表現するものとして詩をつくっていくという意志があったと思います。その意志を最後まで受け継いで、書き続けたのが北村さんなのではないでしょうか。言葉の革新ということを絶えず試みていた。

北村さんがもっとも信頼していたのは鮎川信天さんでした。鮎川さんがお亡くなりになったとき、ショックでとても深く悲しまれ消沈されていたことを思い出します。第一詩集『北村太郎詩集』に鮎川さんが解説を寄せていて、北村さんはふたつの不幸(時代の不幸と「個人の不幸」)をもっていと書いています。ひとつは戦争で多くの仲間を失った不幸、もうひとつは潮干狩りで妻子をいっせんに亡くされた不幸です。ふたつの不幸を経た北村さんの詩は、重さ失って軽くなることを恐れないだろうと鮎川さんは書いていました。北村さんのことも、北村さんの詩のこともいちはん深く理解していたのは鮎川さんだとわたしは思っています。

ける。オタクシヤクシは手をかけなくても自然に蛙になる。それは人間はどうかなのか。この授業では「バー」を例にあげるところがあります。バーはダムをつくる。非常に精密なダムです。しかしそれだけバーが精密なダムをつくっても、それは生得のものだという。生まれつきということ、習得の反対です。人間だけは、外にある価値を習得して、きょうあすを生きていく力にできる。学術や学問というのはわたしたちにとってそういうイメージがあります。

カントは二七二四年に生まれて一八〇四年に亡くなっていくので、当時としては長命の八十歳まで生きました。アカデミー版の『カント全集』の刊行がはじまったのが一九〇〇年ですから、亡くなって百年近く経って刊行が開始され、二〇一八年現在までまだ完結していません。人間だけが外にある価値を習得し自分の生きる力にできるというとき、たとえば百年三百年の長いスパンで考え、それを勉強し、習得し、きょうあすを生きていく力にできるというのが学術や学問に対するわたしのイメージです。そういうイメージを持ちながら、これからは春風社の本を引き続きつくっていききたい。港の人の本づくりにこれからは勉強させてもらいながら、春風社は春風社のアイデンティティを大事にして本をつくっていきたくて思っています。

最後に、港の人のこれからについてお話をいただけますか。

上野 港の人は、詩集という書店でもっとも売れない分野もっともさみしい分野に力を入れています。なぜ日本では詩が疎んじられているのか。年々、詩がなくなっていく。書店からも詩集が消えつつある。そんないまの詩のありかたはどうしてなのだろうか。詩の言葉が磨かれてゆけば、社会は滅びの姿ではないか、そんなことを考えたらどうします。詩のつくり手や版元の問題であり、教育や文化、社会の問題でもあります。そのなかで、徹々たるものであっても詩集を出していきたくて、それが港の人のちいさな役目になればいいかと思っています。

宇佐見英治さんが戦地に『立原道造詩集』を持っていかれた話をしましたが、詩は、死に一番近い書物だと思えます。死に近く、生に一番近い書物なのではないかと思えます。そのことを大切にしながら、これからはちいさな花火を打ち上げていきたいと思います。



▼三浦衛著、橋本照嵩写真『石巻片影』17・2・13刊、A4変形判二二〇頁・本体二五〇〇円・春風社

ていった。そういった生きようから「詩から、詩」としました。「詩」を一度断念して、再び「詩」にかえるまでに戦後の長い時間を要しました。文筆家として旺盛な執筆時代にあたりますが、新しい散文を創造され、三浦雅士、堀江敏幸といった文学者に大きな影響を与えました。

宇佐見さんは戦争に征ったときに二冊の本を持っていました。『万葉集』と、もう一冊は『立原道造詩集』です。なぜ立原道造の詩集を持っていたのか。それは、個人として生をまっとうしたいという思いからだった。そこに感動しました。

三浦 『言葉の木蔭』には柱がありませんね。

上野 柱というのは何なのかというところを考えると、それは本の決まりごとだからと配置するのだったら、それは違つて思う。柱にはその頁が該当する章名などを記した見出しとしての役割があります。たぶんは辞典などではあれば便利ですが、この本に柱はほらないと思いました。大事なこと文章を対峙するということです。そこに柱という見出しは必要だと考えました。その本にとって何が必要なのかというところを、その都度考え直しながら本を組み立てていく

**電子版 図書新聞**  
**イー新聞と新聞オンライン**  
**で配信開始**  
**定期購読料金**  
 一年(48週) 12000円 を電子版割引で  
 半年(24週) 6480円

**一年(48週) 8400円**  
**半年(24週) 4500円**

図書新聞 イー新聞  
 図書新聞 新聞オンライン

今すぐ検索

『港の人』もむずかしい言葉ではなく平易な言葉で書かれています。しかし誰にも真似られない、レトリックではない、北村さん独自の死生観からの境地を展開しています。当時、横浜を散策しながら街の情景を詩に書かれています。そこから突き抜け、照らす世界がある。それがわたしたちに響くのではないかと感じます。こういった詩集のタイトルを社名にすることで、支えにも、励みにもなっています。

三浦 この詩集はとにかく「いま」というところから生み出されているという感じを受けました。すでにわかっていたことを書いているのではなく、「いま」の連なり、「いまここ」にという感じがこちらに深く沁み入ってきます。

教師を辞めて大空社に入社したのはほんの短いあいだ、埼玉の予備校で教えていたことがあつた。そのとき講師の控室で七十過ぎの理科の先生から、「きみくらいの年齢のひとつからみると、ぼくはむしろ風にならぬか。既に現役を退いた過去のひとにみえるのではないかと。しかしね生きるというのは永遠の現在なんだよ」といわれたことがあつた。当時はほんとになかつたのですが、『港の人』を読んでいてふとそのことを思い出しました。

上野 詩人というのは「晒したひと」とか思っています。北村さんも、大きく晒したひとかと思えます。そこから声を発している。それはわたしの不幸が、絶えず消え去っていくようなことなのだと感じます。「ふたつな不幸、死を抱えていたのだ」と思っています。そして晒すわたしたちを見守ってくれているような気がします。

**event**

▼「第8回かまくらブック」 テーシ(京都市左京区二乗寺エスター「京都」開催 松殿町10) 恒例イベント「かまくらブックフェスタ」。第8回となる今年は10社が集まるイベント。こと京都に場所を移して開催となる。個性豊かな出版社や、本と活字にまつわるユニークな活動をする人々が集まり、出版物を展示販売。会場にはコーヒーと軽食のコーナーも設けられる。書店では重い本の数々と出会うこの遠征の機会をお見逃しなく。

■会期 11月17日(土)11時~19時、18日(日)10時から18時  
 ■会場 恵文社二乗寺店  
<http://www.keibunsha-store.com/access>  
 ■出版 牛若丸 edit (エクリ)、北と南とロイヤリティ、共和国、群像社、タパブック、トムスボックス、編集工房アトぼかろ編集室、りぶる・とふん、港の人

■コーヒー・軽食 yugue (17日)、喫茶never on monday (18日)  
 ■問合せ 港の人(鎌倉市由比ガ浜3-11-49、TEL0467-60-1374、FAX0467-60-11375、メール kamakura@minatonohit.jp)

▼昨年のかまくらブックフェスタの様子

